

日本性に基づく異文化間能力の教育プログラム開発に関する研究

松尾, 知明 / MATSUO, Tomoaki

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

2021-06-03

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02738

研究課題名(和文) 日本性に基づく異文化間能力の教育プログラム開発に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Developing Educational Practices for Intercultural Competence on the Basis of Japaneseness

研究代表者

松尾 知明 (Matsuo, Tomoaki)

法政大学・キャリアデザイン学部・教授

研究者番号：80320993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：地球の縮小化が進み、文化的に異なる人々との相互の交流や依存が深まる今日的な状況に直面して、異文化間能力(intercultural competence)は、だれにでも求められる資質・能力の一つとなった。本研究では、日本人性の概念に基づく異文化間能力の定義、その育成をめざした大学教育プログラムの考え方・進め方を考察するとともに、講義・演習型、プロジェクト型、海外体験型の3つの領域において、異文化間能力を育成するための授業やプログラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義は、以下の3点が挙げられる。第一に、重要であるにもかかわらず、日本において研究が進んでいない異文化間能力研究に着手した。第二に、異文化間能力の国際的な動向を明らかにするとともに、米の人種理論研究の一つの潮流である白人性研究を基礎とした日本人性の概念に基づき日本の文脈において異文化間能力を定義した。第三に、そうした異文化間能力の定義に従い教育プログラムのデザインを構想し、大学教育において実践を行い、その開発事例を提示した。

研究成果の概要(英文)：Due to the progress of globalization, how to develop intercultural competence has become a significant issue in order to function effectively in a multicultural society. Through looking at "Japaneseness" or what is to be a Japanese, this paper aims to explore how intercultural educational practices in higher education can be designed to enhance the intercultural competence. This study consists of two parts: theoretical discussion and its practical application and develops three types of practices: classroom units and activities, intercultural projects, and overseas experiential study programs.

研究分野：多文化教育

キーワード：異文化間能力 多文化共生 日本人性 大学

1. 研究開始当初の背景

地球の縮小化が進み、文化的に異なる人々との相互の交流や依存が深まる今日的な状況に直面して、異文化間能力は、だれにでも求められる資質能力の一つとなった。国内においても移民時代が到来する中で、本格的な多文化社会へ移行する体制づくりが急がれており、外国人とともに生きる異文化間能力の育成が急務となっている。一方で、異文化間能力に関する研究は、国際的には大きな進展がみられるが、日本においては差し迫った課題にもかかわらず、ほとんど研究が進んでいない。

本研究では、大学の教育プログラムにおいてこうした異文化間能力をいかに育成していくのかについての具体的な手立てやプロセスを考察していくが、その際に、日本人性の概念に着目する。日本人性は、目に見えない文化実践、自分・他者・社会を見る見方、構造的な特権として空気のように気づいていないマジョリティの自文化中心主義の視野を形成している。そのため、多文化共生を可能にするには、日本人性に伴う力関係をいかに意識化していくのが、異文化間能力を育成する教育プログラムの中心に位置づくと考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、日本人性の概念に基づく異文化間能力の定義、その育成をめざした大学教育プログラムの考え方・進め方を考察するとともに、講義・演習型、プロジェクト型、海外体験型の3つの領域において、異文化間能力を育成するための授業やプログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、異文化間能力を育成する教育プログラムの基本理念と枠組みを構築するとともに、そのための授業やプログラムの開発をめざして、理論研究、海外調査、国内調査・教育プログラム開発、総合的な研究協議から構成される。では、異文化間能力と教育をめぐる理論や原理、文献リスト作成、研究のレビュー等を行う。では、欧州、北米、アジアを訪問し、聞き取り、最新動向把握、事例収集を行う。では、聞き取りや事例収集を行う。では、これらのデータや研究成果をもちより総合的な研究協議を進める。

4. 研究成果

(1) 理論編：日本人性、異文化間能力、多文化教育、プログラム開発の枠組み

松尾(2019、2021)は、教育プログラムの枠組みとなる日本人性、異文化間能力、多文化教育の目的と内容、プログラム開発の枠組みなどについて検討した。まず、異文化間能力を、日本人性の議論を踏まえて、「日本人性について意識化し内省的にその社会的意味を検討するとともに、異なる人々を尊重し効果的にコミュニケーションをとり多文化共生の実現に向けて協働する力」と定義した。また、日本人性に基づく異文化間能力の構成要素を、知識(自文化、他文化、社会)、スキル(批判的思考、コミュニケーション、傾聴)、態度(思慮深さ、寛容・共感、主体的参画)として整理した。さらに、これらの異文化間能力の定義と構成要素を踏まえ、多文化教育の教育目標と教育内容を同定した。これらに基づき、教育プログラムを開発する枠組みを提示した。

森茂は、大学の国際理解、多文化共生に関する授業、異文化間教育の授業、日本人学生

と留学生の交流セッション等、異文化間能力を育成する授業や活動で利用できるテキストの開発を行った。この中においては、1)講義・演習型、2)プロジェクト型、3)海外体験型のプログラムを開発して掲載した(村田・中山・藤原・森茂編著、2019)。また、今日の多文化共生社会に生きるための資質・能力をどう育成するかを、小・中・高等学校の社会系教科における多文化教育の理論的・実践的検討を通して考えた(森茂・川崎・桐谷・青木編著、2019)。

馬淵(2021)は、欧州諸国の取組に関するリサーチ、現場の一つとしての学会活動、日々の教育現場の3つの領域で得られた知見をもとに、異文化理解・多文化共生に関わる研究と実践の架橋について検討した。

金(2020)は、2018年12月の入国管理法改正を機に「移民」をめぐる議論が盛んになっている中で、これから到来するであろう「新移民社会」を考える上で、「学習権保障という原点を再確認する」ことや、『日本人性』という枠組みから社会教育を考える」ことが、社会教育の課題であることを考察した。また、金(2021)では、体験型プログラムを取り入れた授業実践をもとに、多文化共生と異文化間能力の育成について検討した。

(2) 実践編：教育プログラムの開発

異文化間能力を育む教育実践のタイプとして、講義・演習型、プロジェクト型、海外体験型の授業や学習プログラムを以下のように開発した。

講義・演習型

講義・演習型は、大学において異文化間能力を育成しようという通常のコースや授業である。本研究では、以下のような授業を開発した。

馬淵(2021)は、以下に示した授業を前時の課題の振り返り、担当グループによるプレゼンテーション、講義、テーマを設定したグループディスカッション、まとめという流れで組み立て、受講生からのコメントを検討した。

・国際理解入門：世界と日本を取り巻くコンテクストとしてのグローバル化を、国際化との異同を含めて、経済、政治、文化の諸領域から理解することを基盤として、多文化主義が登場するに至った経緯、その際の問題点としての本質主義的な文化観、文化帝国主義ならびに文化相対主義の問題などを批判的に検討する。

・文化の捉え方：文化という実に多義的な内容をもつ概念を理解した上で、特に多文化共生社会と異文化理解というコンテクストにおける文化の捉え方を、具体例に触れながら検討し、最後にやはり根底に横たわる文化本質主義がいかに異文化理解と多文化共生社会を妨げているのかについて、実例を参照しながら検証する。

・共生社会・日本と世界：それらの課題を克服するための共生社会の構築に向けて、マクロ(政策)、メゾ(カリキュラム)、ミクロ(現場)の3領域からのアプローチ、国内オールドカマーとニューカマーの問題、ホスト国の言語習得の問題、海外の先進事例からの示唆などを通じて、多文化共生社会がどのようにすれば可能となるのかについて、従来とは異なったアプローチを考察する。

松尾(2020)は、多文化共生に関わる以下のテーマを概観する教材と各テーマを深めるための演習問題を開発した。一部「多文化共生について考える」では、以下のテーマのもとに、多様性についての理解を深め、マジョリティとマイノリティの力作用を踏まえた上で、多文化についての見方や考え方、共に生きる課題を考察する単元を開発した。

・一人一人が異なると同時に同じ私たち - 多様性と同一性(1章)

- ・激しく変化する現代社会 - 多文化をめぐる見方・考え方 (2章)
- ・人を理解するとは - 他者理解と自己理解 (3章)
- ・偏見と差別 - マジョリティとマイノリティ (4章)
- ・人としての権利 - 多文化社会と人権 (6章)
- ・日本人性への問い - マジョリティの意識改革 (7章)

二部「移民時代の生き方を考える」では、以下のテーマのもとに、国際的な人の移動に焦点をあて、入管法改正を契機に、多文化化が大きく進むこれからの日本社会でどのように生きていけばよいのかを考察する単元を開発した。

- ・移民時代の到来 - 入管法の改正 (8章)
- ・在日外国人と共に生きる - 青丘社ふれあい館の事例から (9章)
- ・イスラムを知ろう - 信仰をもつ人々 (10章)
- ・外国人の子どもたちと教育 - 言語と文化の支援 (11章)
- ・移民政策の国際的な動向 - 直面する社会統合の課題 (13章)
- ・移民時代を生きる想像・創造力 - パリアフリーとユニバーサル (14章)

松尾(2021)では、外国につながる子どもたちを理解するために、以下のテーマを概観する教材と各テーマを深めるための演習課題を開発した。

- ・外国につながる子どもと教育 - 現状と課題 (1章)
- ・文化間に生きる子どもと言語 - バイリンガリズム研究から (2章)
- ・多様な子どもと生徒理解 - 文化と言語 (3章)
- ・学校での外国児童生徒の受け入れ - 学びの経験のデザイン (4章)

森茂(2021)は、「チョコレート問題」のシナリオのもとに、価値多元社会において異なる価値観や立場を持つ相手を相互に理解し、その相手と共生社会を創っていくことを目的にした「異己理解」の授業を共同開発し、デンマークの中学校と中国の大学で実践した(森茂・ローズコー 2021、森茂・鄒 2021)。

プロジェクト型

プロジェクト型は、学生の主体的なプロジェクトに基づいて異文化間能力を育成しようという教育実践である。本研究では、以下のような授業を開発した。

- ・ヒューマンライブラリー (HL)

松尾(2020)の5章では、HLを企画し運営するプロジェクトの考え方や進め方を示した。HLとは、文字通り、人間の図書館のことをいう。HLは、ある話題をもつ人をお招きして「本」になってもらい、その話題に興味をもつ「読者」につなぐことで、新たな出会いの場を提供するイベントといえる。HLは、大きくは、「司書」「本」「読者」から構成される。主催者である「司書」は、来ていただいた「生きた本」と来場してくれた「読者」の間で対話ができるように環境をデザインする。HLは、マイノリティの声に傾聴するとともに、生きづらさや差別の経験に触れることで、人間の多様性についての理解を深め、よりよい共生社会をつくっていく意欲を育むものといえる。

- ・テーマ研究をしよう

松尾(2019)では、学生が設定した多文化社会をめぐるテーマ(外国人児童生徒、日本語学校、外国人集住地区の団地、多文化共生政策、IBプログラムなど)に焦点をあて、現場での観察やインタビューを含む調査研究を実施するプロジェクトについて言及した。4人程度のチームを編成し協力し合いながら、現状や課題を捉え、問いを立てて調査研究

を進め、多文化共生を推進する方策について考察する。その研究成果については、研究発表会を開いて、パワーポイントを使い発表する。このようなテーマ研究による学習活動を通して、自分の興味関心に従って、多文化共生について主体的に関わっていく態度を育てる。

海外体験型

海外体験型は、海外の現地における体験学習を通して異文化間能力を育成しようという教育実践である。本研究では、以下のようなプログラムを開発した。

・ハワイグローバルスタディーズ（森茂 2020、松尾 2020）

森茂(2020)は、異文化間能力を育成することを目的とした大学の担当科目「グローバル・スタディーズ」を実施した。本プログラムは、ハワイにおけるフィールドワークを通して、日本人移民・日系人に関する認識を深めるとともに、各自が調査・体験したことをもとに、学校現場で活用できるグローバル教育の教材（写真アルバム、絵本、紙芝居、絵地図、マンガ、カルタ等々）づくりを行うことを目的としたものである。成果として、参加学生のパフォーマンス課題（教材）と自己変容の過程を記録した報告書を出版した。

松尾（2020）は「国際的な人の移動 - 海を渡った日本人」（第 12 章）で、ハワイ海外体験学習に関する教材とテーマを深めるための演習問題を開発した。

・金ゼミ韓国プログラム

金（2020）異文化理解・異文化体験をキーワードに、「日本人性」を中心に異文化間能力育成プログラムを韓国で 2019 年 11 月 11 日から 16 日まで実施した。『異文化間教育』第 22 号特集「異文化間教育研究と『日本人性』」関連の文献講読を行う一方で、韓国の歴史や教育などについて事前学習で学び、その上で、日本と韓国の関係を理解する、韓国文化体験、日本と同じ課題に韓国はどのように対応しているのか：現代的課題に対する日韓比較の 3 本柱でプログラムの内容を構成した。

・台湾キャリア体験学習プログラム

松尾（2021）では、体験学習（国際／台湾）プログラムの考え方・進め方を検討した。このプログラムは、日本との関係が深い一方であまり理解の進んでいない台湾を事例として、グローバルな視野に立ってキャリアデザインについて考察することを目的としている。具体的には、台湾の歴史や社会、文化、人々について学び、中国語の初歩を学び、台湾につながる人々や大学生と交流し、台湾において現地研修やフィールドワークを実施することを通して、多文化社会でキャリア（人生）をデザインすることについて考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金侖貞	4. 巻 764
2. 論文標題 新移民社会を問う	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊社会教育	6. 最初と最後の頁 3 - 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾知明	4. 巻 16
2. 論文標題 多文化教育と白人性 異文化間能力の育成に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 103 - 113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金侖貞	4. 巻 第16号
2. 論文標題 多文化共生と異文化間能力の育成 - 体験型プログラムを取り入れた授業実践から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会教育・生涯学習研究所年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾知明	4. 巻 18
2. 論文標題 異文化間能力とグローバル体験学習プログラム キャリア体験学習（国際・台湾）を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政大学キャリアデザイン学部紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬淵仁	4. 巻 17
2. 論文標題 異文化理解 / 多文化共生に関わる研究と実践の架橋を試みる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪女学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森茂岳雄・ローズゴー、マリエ・ホイロン	4. 巻 -
2. 論文標題 コペンハーゲン市ランデスガーデ学校における『異己』理解・共生授業の実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本国際理解教育学会・国際委員会編『日中韓共同「異己」理解共生授業プロジェクト報告書』	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森茂岳雄・鄒聖傑	4. 巻 -
2. 論文標題 大学における「異己」理解共生授業プロジェクトの実践 - 中国の大学における調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日中韓共同「異己」理解共生授業プロジェクト報告書』	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森茂岳雄編	4. 巻 -
2. 論文標題 ハワイ日系人の経験に学ぶ - グローバル教育の教材づくり -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「グローバル・スタディーズ」報告書	6. 最初と最後の頁 1-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計7件

1. 著者名 松尾知明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 276
3. 書名 「移民時代」の多文化共生論 - 想像力・創造力を育む14のレッスン	
1. 著者名 森茂岳雄、川崎誠司、桐谷正信、青木香代子編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 298
3. 書名 社会科における多文化教育 - 多様性・社会正義・公正を学ぶ	
1. 著者名 村田晶子・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 100
3. 書名 チャレンジ！ 多文化体験ワークブック - 国際理解と多文化共生のために -	
1. 著者名 村田晶子・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 101
3. 書名 チャレンジ 多文化体験学習ハンドブック国際理解と多文化共生のために	

1. 著者名 森茂岳雄・川崎誠司・桐谷正信・青木香代子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 300
3. 書名 社会科における多文化教育－多様性・社会正義・公正を学ぶ	

1. 著者名 松尾 知明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 多文化クラスの授業デザイン	

1. 著者名 森茂 岳雄、川崎 誠司、桐谷 正信、青木 香代子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 社会科における多文化教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	馬淵 仁 (Mabuchi Hitoshi) (20249402)	大阪女学院大学・国際・英語学部・教授 (34442)	
研究分担者	森茂 岳雄 (Morimo Takeo) (30201817)	中央大学・文学部・教授 (32641)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	金 侖貞 (Kim Yunjeong) (40464557)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授 (22604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関